

■ 教育講演 4

浅田流漢方の頻用処方とその応用：三朮附湯について

中田 敬吾（聖光園細野診療所院長）

浅田宗伯が痛みの治療に頻用した処方に三種類の朮附湯がある。桂枝加苓朮附子湯、越婢加朮附湯、葛根湯加朮附湯の三種類である。これらの処方は聖光園細野診療所でも関節痛、神経痛、筋肉痛など種々の痛みに頻用されている。このうち桂枝加苓朮附子湯によるフランス公使レオン・ロセスの治験例は『橘窓書影』に記載されており、余りにも有名である。

桂枝加苓朮附子湯は吉益東洞が創作した桂枝湯加味方で桂枝加朮附湯証でめまい・ふらつきのある者に適用することが指示されている。この処方中には桂枝湯の他に真武湯、苓桂朮甘湯などが含まれているためにめまいという適応症状が加えられていると思うが、私は桂枝湯と真武湯の合方の意味で理解し、特にめまいには拘らず虚証で桂枝湯適応タイプで四肢・関節・筋肉などの痛みやしびれを訴え、真武湯や附子湯を考えたいときに用いている。

越婢加朮附湯は関節の腫脹疼痛を目標に用いることが殆どである。実証の関節炎に応用している。特に関節の腫脹が著しくPunktionを必要とするタイプに応用の機会が多い。慢性関節リウマチ、変形性膝関節症に頻用度が高い処方である。

葛根湯加朮附湯は葛根湯に蒼朮附子を加えた処方である。首肩の凝りとともに首、肩、背、上肢、頭部、顔面領域に痛み、神経痛などを来している場合に適用の機会が多い。変形性脊椎症や肩関節周囲炎の場合には第一選択にすべき処方であると考えている。

講演では具体的な臨床例を示し三朮附湯応用の臨床面での鑑別と応用の参考に添えたいと思う。

略歴

1945.11.20.	和歌山県印南町で出生		
1970.9.	京都大学医学部卒業	1999.6.	日本東洋医学会関西支部代表理事就任（～1997.5.）
1970.11.	京都大学医学部附属病院内科にて研修開始	2000.6.	日本東洋医学会関西支部代表理事就任（～2001.5.）
1972.11.	京都大学医学部附属病院内科研修終了	2003.7.	第51回日本東洋医学会学術総会準備委員長
1972.11.	医療法人聖光園細野診療所勤務	2008.4.	医療法人聖光園細野診療所院長就任
1975.4.	京都大学医学部大学院博士課程入学	2008.6.	森ノ宮医療大学教授就任
1981.3.	京都大学医学部大学院博士課程卒業		第15回国際東洋医学会学術総会会頭に就任
	「The role of prostaglandins in the guinea pig biliary system」で医学博士号取得	現在	（2010.2.26～28 開催 於千葉県幕張）
1984.4.	医療法人聖光園細野診療所副院長就任		日本東洋医学会理事・評議員、和漢医薬学会評議員
1984.5.	日本東洋医学会評議員就任	著書	「漢方医医学入門」（東山書房）
1985.4.	日本東洋医学会理事・関西支部代表理事就任（～1989.5.）		「KAMPO 十大類方」（黄煌著）監訳（メディカルユーコン）
1985.10.	第4回国際東洋医学会学術総会準備副委員長		「張仲景50味薬証論」（黄煌著）監訳（メディカルユーコン）
1990.6.	第42回日本東洋医学会学術総会準備委員長		